
最後のデート

神楽 雅斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後のデート

【Nコード】
N7902C

【作者名】
神楽 雅斗

【あらすじ】
ジュンとユウの出会いは、冷たい雨の降る日だった・・・

第一話：冷たい雨（前書き）

初めまして、神楽雅斗です！これは二年前にあるコンテストに出した話を少し改訂したものです。このサイトで書く初作品でドキドキしてます・・・何でも良いので感想お待ちしております！

第一話：冷たい雨

雨が降っていた。

周りの景色が見えなくなるほど降りしきる中で君はただ、うずくまっていた・・・

少女はまるで悪いことをして怒られ、縮こまった子供のように三角座りで地面をばーっと眺めていた。

一体何時間そこにいたのだろう。

服は落ち葉や泥で汚れ、胸の辺りまである髪は雨で体にびったりくっついていた。

少年はそつと手に持った傘を少女の上に差し出すと

初めて少女は少年に気付き、視線を少年の足から目へと移した。

「風邪ひくよ？」

心配そうに話しかける少年を、少女は不思議そうに見つめた。

不審というより唾然に近い表情で少年を見た。

そのきれいな藍色の瞳は心をどこか遠くに置いてきたように生気が感じられなかった。

「俺んちすぐそこだからさ、この傘あげるよ。だから家、帰りな」

少女はそれを聞くとまた視線を下げて言った。

「・・・もう、帰るところなんて、ありません・・・」

「帰るところが…ない？」

ふと少年は少女の肌を見ると透き通るような白い肌に細かい傷跡があるのに気付いた。

一度にできた傷でないことは傷の古さの違いでわかった。

「家族は？」

「・・・いません」

それを聞くと少年はすっと少女の前にしゃがむとニコッと笑った。

「そっか、一緒だな」

少女は驚いて視線をあげた。

「俺も家族いないんだ」

そう言つと少年はおもむろに傘をたたみ、ふっと空を仰ぎ見た。
つられて少女もその方向を見た。

「悲しみも雨が洗い流してくれたらいいのにな・・・」

「・・・うん」

それがジュンとユウの出会いだった。

第二話：終わりの始まり（前書き）

二人が出会ったのは冷たい雨の降る日だった。傷だらけの少女と心優しい少年はどちらも孤独を抱えるもの同士だった・・・

第二話：終わりの始まり

公園の中央にある大きな木の下のベンチでユウは本を読んでいた。夏の昼間で気温は高いが、木の下は不思議と心地よい。

セミの鳴き声に混じって息荒く、走ってくる音がする。

ユウは本にしおりを挟んで本をバックに入れると

ゆっくり顔をあげた。

同時にジユンがユウの前に到着した。

ぜえぜえ肩をし、しばらくして息を整えてからジユンは言った。

「ごめん、ユウ！実は昨日課題が出てさ・・・」

ユウはジユンが今回の遅刻のいきさつを身振り手振りで語っている様子を

ただニコニコしながら聞いていた。

「・・・で遅れてしまったわけ。ほんとごめん！」

すっと立ち上がるとユウは答えた。

「ジユンが遅れるのはいつものことだからもう慣れたよ」

笑顔を少しも崩さず、ユウは言った。

「そんなことより今日はどこに行く？」

待ってましたと言わんばかりに、にやりとしてジユンは言った。

「じゃーん！これなーんだ!？」

ジュンはポケットからしわになった二枚のチケットを取り出した。

「え！これってもしかしてリバースファンタジーの先行試写会のチケット!?」

「ピンポン！」

「どうやって手に入れたの?!」

「そりゃあもう、マメになるほど応募はがき書きましたかな」

「ご苦労様でした。」

深々と礼をするユウ。

「いえいえどういたしまして」

同様に礼をするジュン。

顔を上げた二人は目が合うと、思わず笑った。

映画が終わって外はもう夜になっていた。

それは映画について感想を言い合いながら家路に着く途中だった。

「やっぱりこういうSFの大作は映画館で見るに限るよね」

「そうだね」

ズキ・・・

胸を貫かれたような痛みで顔を歪めるユウ。

ジューンは少し前を歩いていて、ユウの変化に気付かない。

「しかし、まさかあの将軍が黒幕だったなんて・・・意外だったな」

「あれは・・・思いつかないよね」

ズキ・・・

できるだけさとられない様に平静を装うユウ。

「しかしヒロインの女の子はかわいかったな。それにさ」

耐え切れず倒れるユウ。

それはジューンにとって絶望しか運ばない音だった・・・

第三話：突然に（前書き）

いつものように待ち合わせをし、デートをし始めたジュンとユウ。
しかし、デートも終盤というところでユウが苦しみだし・・・

第三話：突然に

ジュンは振り返り、ユウが倒れているのを確認すると顔を真っ青にし、あわてて駆け寄り、彼女の体を抱きかかえた。

「おい、ユウ！ユウ！！！」

子犬のように震えるユウ・・・

「ごめんなさい・・・」

「え？」

胸を押さえ、激痛が体中を襲っていたが、それでもユウは無理に笑顔を作った。

「もう駄目みたい・・・」

覚悟はしていた。

あの日から、この日が来ることはわかっていた。

それが今日かもしれないと、いつも思いながら・・・

でも、でも何で今日なんだ・・・！

「まだ死ぬな！俺たちはまだやってないこといっぱいあるだろ？二人っきりで旅行にも行ってないじゃないか！デイズニールランドにだって・・・」

死を否定するようにユウのけいれんする手を必死に止めた。それしかできなかった。

「いいの・・・もう十分ダカラ」

もう時間がない。

瞳があの日と同じように生氣を失っていく・・・
思わず涙を溢れさせながらジyunは言った。

「俺はユウが好きだ！愛してる！だから俺と・・・」

「私も涙ヲ流シタかったナア・・・」

視界が黒くかすんでゆく・・・
ジyunの泣き顔が歪んでいく。

これが死か、と思いながらユウの意識は次第に薄れていった。
ふと雨の音がした。

につこり笑ったジyunが自分に話しかけている。
一つ一つ温かい言葉が自分を癒すのがわかった。

気付けばあんなに澱んだ空は晴れ渡っていた。
これが「走馬灯」というやつか。
でも最期にコレが見られて良かった・・・

—ぶつん—

テレビの電源が切れるような音がユウが聞いた最後の音だった。

第4話：涙（前書き）

デートの途中、倒れたユウは完全に息を引き取った。彼女が死なな
くてはいけなかった理由とは・・・？最終話です。

第4話：涙

「ユウーーーーー!!!!」

肩を震わせて泣くジュン。

その背後にいつの間にか喪服のような黒いスーツを着たサングラスの男が立っていた。

長身のその男はジュンに話しかけた。

「橋本様」

ジュンの動きが止まる

「橋本純様、UR - 72619のお引取りに参りました」

「帰れ」

振り返らずジュンは答えた。

「しかし」

「帰れと言っているだろう!」

困った顔をした男は言った。

「我が社のアンドロイドUR - 72619は今や生産中止の型です。修理しようにももうこの会社にもパーツはありませんよ」

すっと立ち上がるとジュンはユウを抱きかかえたままその場を去る。

「橋本様!!」

明かりがまぶしい

気付くと少女は白いベットの上に横たわっていた
ふと横を向くと40代前後の男が微笑みながら自分を見ていた

「気が付いたかい？」

「ここは・・・？」

「研究室だよ」

「あなたは？」

にこりとして答えない男。

ふと周りを見るとそばにあった机に写真たてがいくつかあった。
全てジュンと自分の写った写真だ。

はっと気が付き、写真のジュンの笑顔と目の前の男を見比べるユウ。
よく見ればあの雨の日に見た優しい目はそこにあった。

「まさか・・・ジュン!?でも・・・なんで?!」

「いやあ、君を生き返らせて、しかも人間に近づけるのはけっこう大変な実験だね」

「なんでそこまで・・・！」

にこにこした顔を一变させ、まじめな顔をしてジュンは言った。

「あの時、言い切れなかったことを言うためさ」

「言い切れなかったこと・・・？」

「俺はユウが好きだ。愛してる。だから俺と・・・」

一呼吸置いてジュンは答える。

「俺と・・・結婚してくれませんか？」

そう言ってジュンは古びた箱から指輪を差し出した。
すうつと一筋の涙がユウの頬を流れた・・・

第4話：涙（後書き）

これを生み出すまで苦労しました。今回は小説として書きましたが、原作はラジオドラマでした。大会用に時間制限などがあり、わかりやすくしないといけなかったりという大変でした。オチ（ユウの正体）が一番悩みましたね。天使案が最初有力だったのですが、鶴の恩返的に「正体ばれたのね・・・さよなら」より死別のほうがグッと来たのでアンドロイドにしました。人間にしかったのは「男の一途さ」というのを出したかったです。人間にしたら死んだら終わりですからね・・・

どうだったでしょうか？自分的には好きな作品です。コメント一言でも頂けると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7902c/>

最後のデート

2011年10月4日11時26分発行